Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

自主シンポジウム 8

LD、ADHD が疑われるなど 特別なニーズをもつ子どもの子育て・保育

企画・司会者 ：田中　良三（愛知県立大学）
話題提供者 ：今泉　依子（静岡県・発達支援 NPO まほろば）
〃　　：飯田　和代（京都市・洛西保育園）

Ⅰ 趣旨

いま、保育及び教育現場では、従来のタイプとは異なる子どもの保育・教育に頭を悩ませています。保育にあっては、障害児保育の対象にならないが発達上のグレイゾーンにあって、保育・子育てにおいて大変な困難を伴う子どもたちの問題です。また、学校では、養護学校や障害児学級よりは通常学級に在籍する LD（学習障害）、ADHD（注意欠陥・多動性障害）、高機能自閉症など特別なニーズをもつ子どもたちに、深刻かつ切実な悩みを抱えています。

このシンポジウムでは、これらの特別な保育的ニーズをもつ子どもをどう理解し、取り組んでいったら良いのかについて、幼児期の子育て・保育実践について考えたいと思います。

Ⅱ 提案①

ＬＤ・ＡＤＨＤ等軽度発達障害児の子育てと保育
―『見えない障害』を理解する―

今泉　依子（発達支援ＮＰＯまほろば）

1 はじめに

わたしは、「ＬＤ等軽度発達障害児の発達支援」をテーマーに、この十数年、支援を受ける側と支援する側の両者のパイプ役を務める活動をしてきました。支援を受ける側としては『静岡ＬＤ児・者親の会きんもくせい』の相談役として、支援者側としては発達相談員、家庭相談員、ＬＤ巡回相談員として、現在、ＮＰＯまほろばの活動に発達支援スタッフとして参加しています。「まほろば」は何らかの弱さをかかえている子どもたちが、安心して自分を出せる場、人として大切にされる場の広がりをめざしています。

「きんもくせい」は全国にＬＤ親の会ができはじめた1990年に設立され、現在100人程度の会員がいます。初期から入会していた子どもたちもすでに青年期、成人期をむかえています。退会された方もいますが、退会するしないに関わらず、青年期、成人期のＬＤ児者の少なくない人たちが、就労問題や精神的な問題で困難な状況にいることが伝わってきています。彼らの青年期、成人期にいたる道筋の様々な困難な問題―学齢期の学習、友人関係での孤立、いじめ、不登校の問題、義務教育以降の進路の問題、就労挫折等―につきあってきて、彼らがこの社会に適応するための努力をしいられながら、しかし、なかなかこの社会で受け入れられずにいる現状の厳しさを痛ましく思います。ここでは、ＬＤ等軽度発達障害児の親から報告された乳幼児期の問題に焦点をあてて、問題の軽減のために、支援者側ができることは何かを考えたいと思います。

2 軽度発達障害児の親たちの苦悩

軽度発達障害児は、障害が目に見えにくいために、親もなかなか障害があることに気づきません。ここが先天性の障害児の親との大きな違いです。しかし、育てているうちになんだかおかしいという思いにとらわれてきます。その時期がいつ頃から始まるのかは個人差が大きいけれど、多くの場合、保育園、幼稚園などの集団生活の始まりとともに、親の不安は強くなっていきます。しかし、初期不安の時期には、障害を否定する気持も強く、〈育て方〉にその理由を求めようとする気持もでてきます。〈軽度発達障害児の育ちのアンバランスさと親の育児不安＞の悪循環が強まったり、軽減されたりするのは、①親自身の気持のありかた（アンバランスさの理由がなかなかつかめないこと）②子どもとの関係（扱いにくさ等で子どもとの関係のとりにくいこと）③専門家（先生と呼ばれる人たち）との関係（軽度ゆえに支援を受けにくいこと）④その他、親族、近隣の人等との関係（育て方を非難されやすいこと）の 4 つの要因がからみあっています。そして、

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

この悪循環は、親だけでは切ることができないということを支援者側は知ってほしいと思います。

3　支援者の役割

相談員として、保育者が対応に苦慮する親子が増えているという報告も聞きます。そのなかには、発達検査を行うと、軽度発達障害が疑われる子もいます。しかし、なかなか専門機関につなげることがむずかく、保育者もストレス状況に陥いっているようです。しかし、初期不安の時期に保育者等の支援者を信頼できるかどうかでその後の悪循環が軽減される度合いも違ってきます。障害かどうかもわかりにくい「見えない障害」を理解することは難しいと思いますが、支援者が困難状況の親を受け止めていこうとする気持が伝わったとき、親も子どもの弱さを受け止めて、障害に直面化する勇気がでてくることを実感しています。〈障害名〉が排除につながらないよう支援の輪を広げていきたいと思います。

Ⅲ 提案②

学習障害が疑われる子どもの保育

飯田　和代（洛西保育園）

＜S 君の入園経過＞　S 君は、正常分娩でほぼ順調に発達していました。しかし、単語は出るものの発音が不明瞭で、母親はS君の思いをとらえにくく、3歳3ヶ月の時に保健所で「言葉の遅れ」を指摘され児童相談所を紹介されました。言語の獲得には集団の場の保障が必要という判断から当保育園に入園する事になりました。3歳8ヶ月でした。

＜3歳児クラス＞　自分の思いを言葉で相手に伝えたいが発語が不明瞭なため思うようにいかない苛立ちからパニックになりよく泣いていました。集団にも馴じみにくく、部屋から飛び出し自分の好きな遊びをくり返していました。保育1年目は、S 君が保育園を好きになる事を大切に、保育者を支えに友達と遊べることを目標にしました。

＜4才児クラス＞　生活習慣は特別手をかける必要もなく、行動の切り変えも他児とともにスムーズにできていました。しかし、ブロックや砂遊びで一人黙々と遊んでいました。コミュニケーションの手段として言葉を使いこなすことができず、自分だけの世界に満足していました。友達は、自分の思いと違うと大泣きをしてパニックになってしまうS君に戸惑っていました。S君の心の支えとなるのはあくまで保育者でした。保育の場面では、保育者の意図が通じにくいということがよくみられました。

＜描画活動＞　「運動会でクラスで取り組んだ楽しかったことを絵に描こう」と取組みました。楽しそうに描き始めたS君ですが、描き終えて話してくれた内容は「自分がみていて楽しかったこと」になっていて、妹のAちゃんのクラスのとりくみをとても楽しそうに話してくれました。保育者は「アレ？」と思ったのですが、まずは受け止めてもう一枚描く事を進め、S 君も「わかった」と言って描き始めたのですが、結果は同じでした。それ以上求めることははせず楽しく描く事を大切にしました。S 君が一つの事を思い込み取組んでいる時に修正を求めるとパニックになり泣いてしまいます。説明すればわかってもらえるのではないかと、かみくだいて説明するのですが、S 君は、自分が否定されたと思う気持ちが強く、良い結果が得られないからです。

＜お母さんとともに＞　お母さんも S 君に困っていました。一緒に専門機関に出向き、聴覚情報を処理する力の部分が弱いのではないかと診断されました。聞いても理解できない部分はモデルとなる他児の行動を見て補っていっているとのことでした。聞く力の不充分さを補う為に、具体物を見せるなど視覚的にとらえるための配慮や、一度に多くのことを指示しないなどのアドバイスを受けました。

＜5才児クラス＞　S 君を理解するために、必要に応じて医療機関とお母さんと保育者の三者で保育参観やケース検討に取りくみました。S 君は4歳クラスの後半から友達にも目を向き始め言葉も明瞭になり、自分から友達の輪の中に入りたいという気持ちを出すようになってきました。時々思い込みに走ってしまい、「もうS君は」と否定の言葉をかけられてとても悲しそうにしていました。今までのS君なら否定されるとパニックになっていたのが、友達と遊びたいという気持ちが育ち淋しさを隠しきれないようでした。自分では一生懸命しているつもりでも何故か違うという事を S 君自身が感じ始めていたようです。保護者の傍に来て手をつないだり、背中にくっついたりという行動が増え「シンドイヨ」という信号を表すのでした。保育者はS君の気持ちを代弁して友だちとの関係をつけていくことを大切にしました。その中で、S 君の描画が友達に認められて自信を持ち始めました。それがきっかけで苦手な事にも挑戦する姿が見られるようになりました。

＜おわりに＞　わたしたち担任は、S 君について医師や発達相談員からアドバイスを受け、全職員と共に取りくみました。その結果、S 君が肯定的に自分を見つめる保育ができたのではないかと思います。そして、S君から多くのことを学ばせてもらいました。

NII-Electronic Library Service